

外国人と日本人とが、ともに豊かに生きる地域社会を!

ハロー フレンズ



2016年 **冬** 号(季刊) 第138号

あけましておめでとうございます

新年のご挨拶が遅くなり申し訳ありません。皆様お元気で新年を迎えられたことと思います。

いよいよ2016年がスタートしました。昨年はIS等によるテロや、シリアやアフガニスタンからの難民、世界各地の大自然による災害等、不安と波乱に満ちた1年でしたが、2016年はせめて、安心して暮らせる年になってほしいと願わざるを得ません。

一方、木村・梶田両氏のノーベル賞受賞やラグビーワールドカップの3勝等うれしいニュースもありました。

ふじみの国際交流センターも、二つの教育賞をいただくといううれしいことがありました。

1つは、読売新聞社がすぐれた業績をあげている教育者や団体を広く全国から選び、その功績を顕彰することで、現場で活躍する人々の励みとなり、ひいては多様で創造性に富んだ教育環境づくりを推進することを目的とした「読売教育賞」です。

もう一つは「埼玉・教育ふれあい賞」の受賞でした。埼玉県内で教育活動に熱心に取り組んでいる学校や教育関係団体を表彰してくれるものです。

いただいた二つの賞に恥じないように、責任と誇りをもって、皆で力を合わせて今年も活動していきます。

変わらぬご理解とご支援をどうぞよろしくお願いいたします。(石井ナナエ)



読売教育賞



ふれあい教育賞

二つの教育賞をいただきました

*第64回読売教育賞・ 地域社会教育活動

読売教育賞は1952年に読売新聞社が教育の発展の一助にと創設した賞です。対象は教育の現場で意欲的な研究や創意あふれる指導を行い、優れた成果をあげている教育者や団体です。全国から13部門に114の応募があり、ふじみの国際交流センターは地域社会教育活動部門の最優秀賞に選ばれました。

応募のタイトルは「共に学び共に育つ好循環 《市民による多文化共生の実践》」です。

狙いは、『社会に適応するための努力をしているのにうまくできず、社会生活上さまざまな困難をきたしている在住外国人を支援し、社会生活の不自由さ、家庭生活のしづらさを解決していけるようエンパワーメントし、誰もが自分の将来を想像し創造する生き方ができる社会を目指す』としました。

応募の理由は、『Think global Act local の精神に基づいた、市民による多文化共生の実践モデルとして、助言や知識をあらゆる手法や媒体を通してPRし、社会の理解を得るとともに、200万人にも及ぶ移民の実情を知ってもらい、担当省庁の設置を望むことです。また使命感と熱意をもって活動してくれているスタッフの能力が、できれば賃金や社会的評価によって裏打ちされることを期待している』としました。

原稿用紙20枚の応募文と、FICEC18年の歴史、日本語教室や多言語情報を提供するときの心意気とフィールド演習の報告書の4種類を提出しました。

応募の全文は2月に読売新聞のHPに掲載されるようなので、概要だけをお知らせします。

タイトル「共に学び共に育つ好循環」

- 1 在住外国人の生活課題を解消するふじみの国際交流センターの活動
- 2 移住でなく定住型に変わった最近の外国人事情
- 3 多文化共生の第1歩は、日本語教室からの出発
- 4 多文化共生の実践に欠かせない外国人スタッフの活躍
- 5 外国人の活力を地域資源とするためにほんの少しのサポートが大切

6 生きるために必要な基礎学力を身に付け、社会に適応できる子どもを育てる

① DV被害を受けシェルターに入居した母親とその子どもたち

② 生活相談に訪れた親と、その生き方に翻弄される子どもへの支援

③ 国際子どもクラブに通う子どもたち

④ インターンシップで受け入れた高校生

7 大人の学びとNPOの可能性

8 ボトムアップの組織づくりとすばらしき仲間たち

9 共に学び共に育つ好循環

の9項目にまとめました。そして、

『一歩前に出て外国人と関わることで自分の世界も広がる。外国人と接することで感動したり驚いたり、周りのことに興味が広がったり、物事の基準を考え直したり、細かいことにくよくよしなくなったりする。FICECで体験した「共に学び共に育つ感動」を社会に大いにアピールしていきたい。

一人が変われば地域が変わる。地域が変われば社会が変わる。こんな実感が味わえるのも外国人との交流活動があったからこそで、常に学び続ける存在としての団体でありたいと思っている』とまとめました。これからも皆で力を合わせ、共に学び共に育っていきたくて考えています。

*埼玉県ふれあい教育賞

この賞は教育に対する関心と理解を一層深める機会として、埼玉県が毎年11月1日を「彩の国教育の日」に指定し、日々の教育活動に熱心に取り組んでいる学校や教育関連団体を表彰するものです。表彰を始めて9年目を迎えた27年度、県国際課の推薦により、県内の41の学校・団体の一つとしてFICECも表彰されました。

国際子どもクラブの活動を中心とした、18年にわたる青少年育成活動を認めていただいたものです。

FICECは表彰式でプレゼンテーションを実施し、彩の国教育の日推進会議委員から講評をいただきました。また、同会場に取り組みを紹介したパネルを展示し、副知事を始め参会された多くの方に御覧いただきました。(石井ナナエ)

いつかFICECでボランティアとして 後輩に日本語を教えたい

王 傲くん

中国ハルピン出身。現在19歳。川越工業高校定時制の4年生。父親・母親・王くんの3人家族。先に来日していた父親の後を追って、2011年4月に15歳で母親と日本に来た。その後、大井中学校の3年生に2学期から編入。

日本に来て驚いたのは、みんながさしみを食べていることと、電車が時間通り頻繁に来るので便利なこと。中国では生の魚はほとんど食べないし、電車は30分に1~2本ぐらいしか来ない。今でもさしみは食べられない。

FICECのことは、中国人の友人からパンフレットをもらって知った。FICECには毎日スタッフがいて日本語を教えてくれるので、夏休みや土曜日の子どもクラブに来ていた。中学校では、相談室で日本語の先生に日本語を教えてもらっていた。それが、FICECのスタッフの山崎さんだった。山崎さんは僕に、「日本語をがんばって勉強して覚えて欲しい」と日本語の教科書を渡してくれた。中学校では、週2~3回、1回2時間ぐらい学習した。半年で日本語は普通に話せるようになったが、「に」「を」「が」「は」などの助詞の区別が難しい。バスケットを中国で小学校4年生からしていたので、体育の時間は楽しかった。

当時は、日本語が話せなかったもので、日本人の友人はなかなかできなかったが、FICECで他の中国から来た友人ができた。一番の思い出は「国際フェスティバル」で、母が餃子と饅頭のお店を出して、それを手伝ったことだ。

今年3月、高校を卒業し、電気の専門学校に行くことが決まっている。昔は通訳になりたいと思っていたが、今は将来電気関係の仕事につきたいと思っている。

今、父親は中華料理店の厨房で働き、母親も弁当工場で仕事をしていて、生活は順調でとても楽しい。僕もスーパーの精肉コーナーでパック詰めやラベル貼りのバイ



中国ハルピン出身。現在19歳。川越工業高校

トをしている。友人が辞める時に紹介してもらった。ずっと日本には住むつもりだが、中国には祖父母が住んでいるので、時々中国に帰る。小さい頃から育ててくれて、祖父母は大好き。週1、2回電話で話している。

FICECがあつてすごく助かった。無料で日本語の勉強や高校へ行く時に進路の相談ができたから。今も休みの日に、学校で分からないことを聞きにFICECに行く。母国語で相談できるのでとても気持ちが楽になる。今では日本人の友人が多いので、中国語は家族以外ではあまり使わない。趣味は日本の将棋。携帯で学校の友達と対戦している。友達とはゲームの話をよくする。日本と中国の若者は遊び方が違う。日本人はPSPやDSをよくするが、中国ではパソコンでゲームをすることが多いのでDSはあまりやらない。

いつかFICECで後輩に日本語を教えるボランティアをやってみたい。日本に来て最初は言葉ができなくても、バスケットやサッカーと一緒にすることで友達はできると伝えたい。

(インタビュー：加藤・小林、写真：本多)

訪ねた先は川越街道から上福岡駅寄りに少し入った一軒家だったから、センターの設立からほどない頃だったのだろう。当時「21世紀は国際化社会」と盛んに言われ始めていた。

初めて訪ねた私にフィリピン人女性がお手製のスープをふるまってくれた。内職をする場があり、行き所を失くした外国人母子に1週間程度寝泊まりできる場も用意している、と石井さんは言った。

ここはイメージしていたような華やかな交流の場ではなかったが、温かさがあった。アジア圏を主とする様々な国の人たちや、様々な事情を抱えることになった人たちが手を取り合って、それぞれができることをしながら、異国での生活の安らぎのひと時と希望を紡いでいた。決して目をそむ

けてはいけない「国際化の一つの側面」を私は衝撃を持って受け止めた。

あれから20年。ふじみ野市内に居を定めた縁もあって、何か出来ることがあればと、昨年、私はセンターの門を叩いた。この間に、センターは認定特定NPO法人となり、幅広い事業を展開していた。

「多文化共生・自立支援・国際理解」それはスタッフ同士を繋ぐ共通の思いでもあり、「文化の違いを超えて、誰もが人として認められ、尊重し合って生きる環境づくり」とも読める。

一方、日本に住む外国人はますます増加し、問題も多様化・複雑化してきている。国の動向とともにFICECの今後は目が離せない。

見送りの三振より 空振りの三振

パート II

石井 ナナエ

〇月〇日

日本には「家族滞在」の資格を持つ外国人が約12万6千人住んでいる。A君もその一人で夜間高校の4年生。就職を考える時期なのだが、家族滞在ビザで在留する人の就職は難しい。まず在留期間が扶養者の在留期間と同じになるので、彼の場合父親の在留期間が満了すると彼の在留期間も満了することになる。また、家族滞在の在留資格では、資格外活動許可の範囲の週28時間以内しか働くことができない。仕事の内容も「人文知識・国際業務」に限定される為、就職の機会が限定されてしまう。どうしたものかと悩んでいた所、朗報が届いた。

家族滞在中で在留している人の中で小さいころから日本で暮らし、日本の義務教育を経て高校を卒業している等、日本社会への十分な定着性が認められる人が「定住者」への在留資格変更許可申請をした場合、日本の社会に十分定着性が認められる人として「定住者」に変

更許可する方向で検討してもらえよう。中学生で日本に来た彼の場合この許可を得られるか未定だが、真面目で心優しく、日本が大好きという彼には是非適用できることを願いたい。

在留資格を整備したり、上陸審査の円滑化に向けた手続を新設したり、入管法は目まぐるしく変わるが今回の改正は大いに評価したい。

〇月〇日

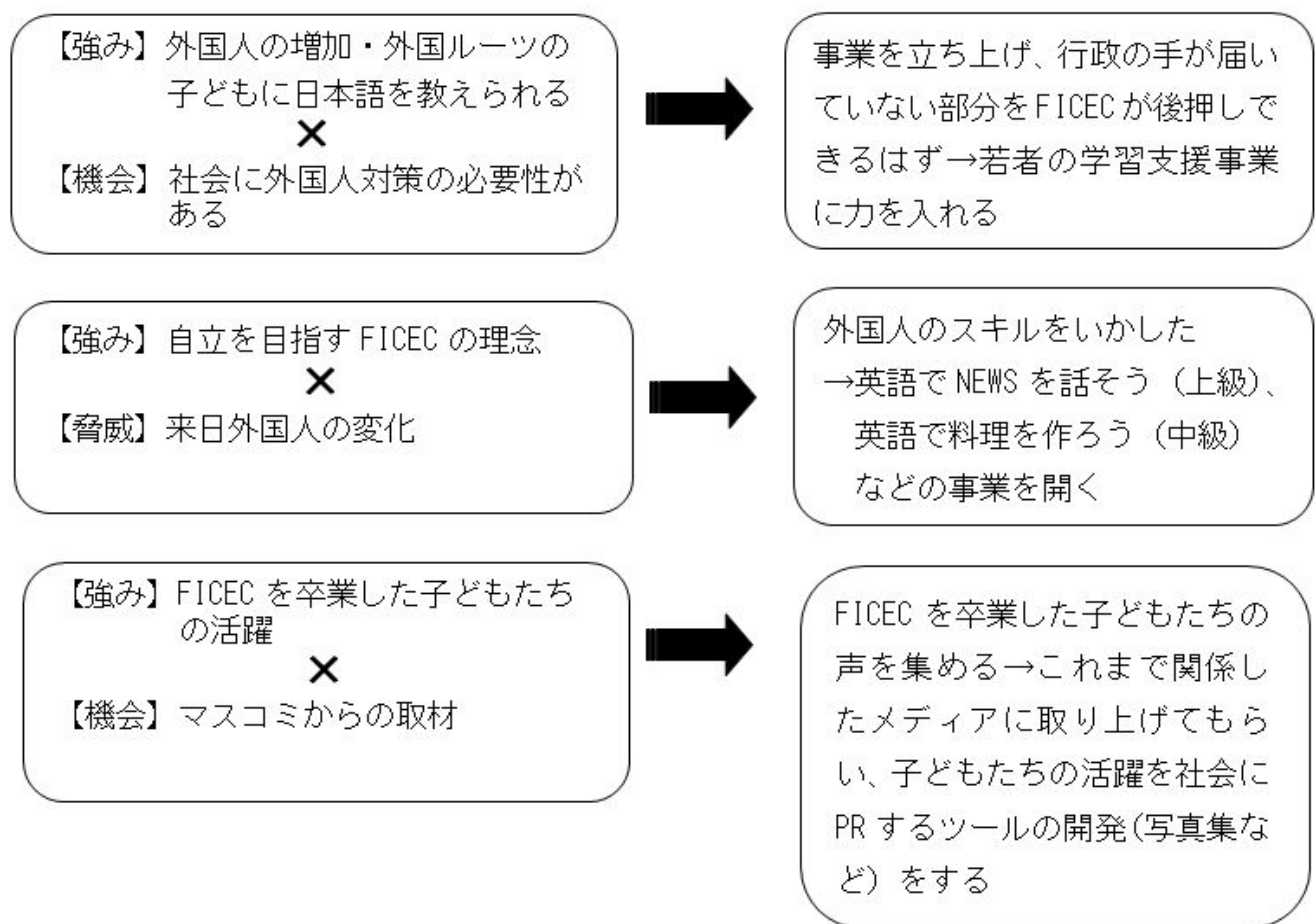
3日間のお正月休み、家の近くをぶらぶら歩いた。エルニーニョの影響で暖冬の毎日、公園で遊ぶ親子が目立つ。男の子は凧揚げでなくフリスビーで、女の子は羽根つきでなくバドミントンで遊んでいる。形は変わっても家族で遊ぶ様子は心が和む。明日からセンターが始まる。今年はどうな事があるかしら。どんな人に会えるかしら。外国人事情はますます複雑に難しく、忙しくなるだろう。大きく深呼吸してみた。毎日行く所があり、毎日やることがある幸せに感謝した。

FICECってどんな団体!? ～SWOT分析から見えてきた私たち(後編)

前回のハローフレンズ秋号で、現在FICECの広報部が取り組んでいるSWOT(スウォット)分析について書きました。今回はその続編として、SWOT分析後、どのような事業アイデアが出てきたか少しご紹介したいと思います。

スタッフ会議では、スタッフ全員で以前の取り組みで出てきたFICECの強み(Strength)、弱み(Weakness)、機会(Opportunity)、脅威(Threat)を、「強み×機会」、「弱み×

機会」、「強み×脅威」のようにそれぞれ一つずつ掛け合わせていきました(「弱み×脅威」は、事業提案しても取り組むのが最も困難で、弱みより強みを活かした方が良いとの判断から行っていません)。そして、掛け合わせたものの中で、現実的に実行していけそうなものを抜き出し、どのような事業が考えられるか話し合いました。例えばこんな感じです。



この中ですでに着手しているのは、三つの目のFICECを卒業した子どもたちの活躍を、社会に周知してもらうためのツールの開発です。写真集、パネル展示やチラシの作成などを想定しています。私たちが、地域で暮らす外国人のより所として存続するためには、日本での外国人の暮らしや私たちの活動を広く人々に知ってもらい、FICECの存在価値を高める必要があります。地域の人々、多くの人々に支

えてもらえるFICECにする必要があると考えています。そのため、現在FICECを卒業した子どもたちに順次インタビューを行っています。FICECに関わって、しっかり自分の道を切り拓いていった子どもたちの成長ぶりを今後も温かく見守り、ご支援いただければと思います。

(広報部担当 加藤)

ウズベキスタン料理を作って食べましょう 国際交流サロン企画



11月21日（土）富士見市ピアザ☆ふじみにて、ウズベキスタン人講師による「ウズベキスタン料理を作って食べましょう」イベントがありました。大きな赤いピーマンにひき肉や米をつめてじゃがいもやにんじんと一緒に煮込んだスープ、かぼちゃとたまねぎのパイ、サラダを作りました。日本人の口にも合うシンプルな味でした。食事が終わった後は講師のご家族から国についての講義を受け、ウズベキスタンを身近に感じられた一日になりました。

日本語教室でイベント ～年末のそば打ちと年始の書初め～

日本語教室では毎年末に「そば打ち」、年明けに「書初め」を行います。「そば打ち」は学習者さんと日本語ボランティアの日本人と一緒に、蕎麦を粉から練って伸ばし、細く切り、茹でてにぎやかに食べるイベントで、1年の最後を締めくくります。「書初め」は、それぞれが今年目標を書きます。両方とも沢山の人が参加してくれました。日本語が早く上手になるといいですね。



子どもクラブお楽しみ会と「先輩の話を聞く」



12月26日（土）子どもクラブのお楽しみ会が開かれ、子ども達、ボランティアとスタッフ総勢40名で食事やゲームを楽しみました。その後、FICECで勉強し、進学した先輩を囲んで、受験や将来の事についてアドバイスをもらう時間を設け、子ども達は色々なことを相談していました。

これからのイベントのお知らせ 台湾料理教室 国際交流サロン企画

日時：2月20日（土）

場所：ピアザ☆ふじみ 食育推進室（ふじみ野駅東口・交番となり）

時間：10：00～14：00

参加費：1,200円（当日担当者にお支払い下さい）

持ち物：エプロン・三角巾・お持ち帰り用タッパ

申し込み方法：電話でお申し込みください tel 049-256-4290

大根もちと、台湾の正月料理を作ります。大勢の方の参加をお待ちしています！

センターの活動をご支援ください 会員・賛助会員・寄付のご案内

●活動を担う会員……正会員

正会員は、スタッフなどとして活動を担っていただく会員です。この会員は、総会などでの議決権をもちます。

年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

●センターを財政的に支える会員……賛助会員

賛助会員は、センターを財政的に支えていただく会員です。総会等での議決権はありませんが、センターのイベントなどのご案内や、機関誌をお送りいたします。

年会費：個人1口3,000円、団体1口10,000円

会員、賛助会員にはこの機関紙をお送りします

郵便振替口座：00110-0-369511
口座名：ふじみの国際交流センター

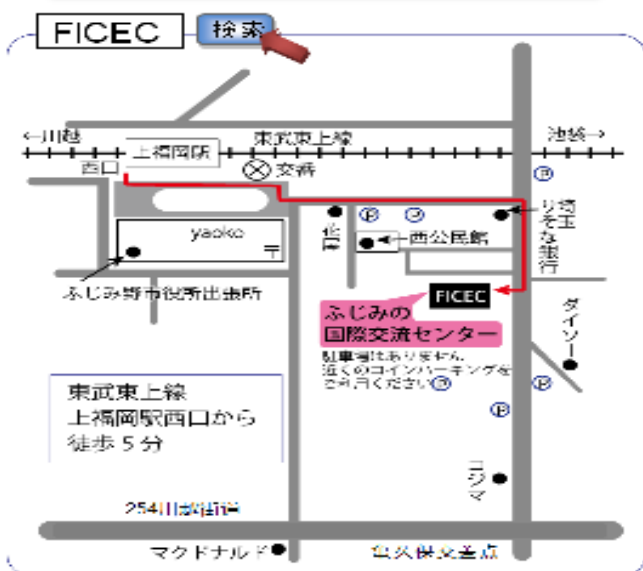
外国人生活相談 無料

月曜日～金曜日 10:00～16:00

電話：049-269-6450

困っている外国人の方がおられたら
センターをご紹介ください。

※コピー代など料金がかかる場合があります



埼玉県指定・認定
特定非営利活動法人 **ふじみの国際交流センター**

〒356-0004 埼玉県ふじみ野市上福岡5-4-25
TEL:049-256-4290 FAX:049-256-4291
生活相談専用電話 049-269-6450

ご寄付をいただいた方々 ご支援ありがとうございます

●2015年1月～(50音順・敬称略)

阿澄康子、穴沢エミリン、新井順子、新井洋子、荒田光男、イオン(株)大井店、石井ナナエ、石塚雄康、イスマイロワ・マストラホン、板倉浩子、伊藤真弓、岩田仁、岩田レニ、インデイ・ヤマンガ、上原美樹、尾浦与子、大澤エミリー、太田原裕、荻原千代子、小熊千寿子、小原知子、加藤久美子、加藤惣一郎、加藤由里子、葛西敦子、金沢国勝、神田順子、木村澄恵、木村梨絵、丘亜蘭、邱皇親、樟山直美、熊谷洋興、栗島三千代、国際ソロプチミスト埼玉、木場ひろみ、小林暁美、駒形一夫、酒井有香、サタール・イクラ、佐竹裕子、佐藤弘康、佐藤義治、島田道子、アナリザ・シモモト、鈴木プレシーラ、高橋 博、竹内直江、武田和子、田中つや子、坪田幹男、チャミンラ・ニサンティエー、チョン・ヒョンスク、寺村璧如、戸塚成子、内藤忍、中村禎作、沼田伊久俊、野沢弘子、長谷川正江、早瀬佐恵子、東入間地区遊技業防犯協力会、彦由章、彦由真希、松本ノエミ、向吉孝子、矢澤美紀、山内典子、山崎友理、山畑博子、吉井ジュリエッタ、リバテイ、劉圭霖

埼玉県指定・認定NPO法人ふじみの国際交流センターに寄付をしてくださった方は税金の優遇を受けることができます。

ボランティア活動に、ご参加ください

ふじみの国際交流センターでは、日本語指導をはじめ、外国籍市民との交流・手助けをするボランティアを募っています。ぜひ、電話またはホームページから、お気軽にご連絡ください。